

ラパスの便り

鳥取大学メキシコ海外教育センター

～5～

遠ざけるため、お香がたかれる。
この日、私たちは現地の友人宅に招かれた。部屋には彼女の友

人の祭壇が設けられていた。彼女は友人を妹のようにかわいがっていたが、交通事故で亡くなったそうだった。彼女は祭壇の前に友人の思い出を語りながら、夜に訪れるというその魂を心待ちにしていた。

十一月に入るとさすがに性にもよるのだらう。がに日が短くなってきた。メキシコの人々によ

た。夜気も肌寒く感じると、死者の日とは故られる。一、二日はメ人を悼むだけではな

キシコ版のお盆ともいえる「死者の日」だ。謝し、盛大に祝う日な

た。これはスペイン統治ののだそうだ。家々には

治以前の先住民時代故人をしのぶため祭壇

に由来した祭事。肉体が飾られ、写真、菊に

は滅びても魂は永遠に似たマリーゴールド、

存在し、年に一度だけ生前好きだった食べ物

降臨するという。このや骸骨の切り絵、死者

考え方は日本のそれと異なる。マリーゴールドの香りは魂が迷わ

ずかしくし行事はしめやかに日本のお盆と異なり、非常にぎやかに行わ

れた。メキシコの国民の道しるべと



死者の日の様子

メキシコ版お盆「死者の日」

「死者の日」とお盆は表面上「陽」と「陰」で対比される。だが魂の再来を喜ぶという点は一致しており、人間の「死」への畏怖と「生」への執着に両国の違いはないのだらうと感じた。その意味では日本での自殺者の増加、世界各地での戦争などの現象は、人間の精神の根源的な欲求と相反しているようにも思われた。

(鳥取大学農学部三年・西幸田和沙)